

公開シンポジウム「子育ての危機に迫る」

はじめに

教育実践コラボレーション・センターでは、公開シンポジウム「子育ての危機に迫る」を、2010年11月6日、京都大学学術情報メディアセンター南館・地下講義室で開催した。2009年のシンポジウム「学校を問い直す」に続き、現在私たちが直面する教育的課題に対して、センターとして分野横断的に関わる取り組みの一つとして、企画されたものである。

子どもをめぐる状況は、「危機」という言葉であふれている。しかし、モグラたたきのように「学校」と「地域」と「家庭」とにバラバラに対応するだけでは、問題をさらに深刻にするだけである。そのような今こそ行政や学問分野の枠を越えて、さまざまな人々がコラボレーション（協働）して、トータルに「子育て」をつなぐ仕組みを創ることが求められている。そうした立場からセンターでは、「子育ての支援」をテーマとして、学校・地域・家庭・行政の協働に取り組んでこられた、秋田光彦さん・梅田美代子さん・奥山千鶴子さんを報告者に招き、危機をチャンスに変える開かれたデザインを目指して話し合った。

まず本センター長・田中耕治教授の主催者挨拶に続き、司会の本研究科・矢野智司教授からシンポジウムの趣旨について説明がなされた。矢野教授は子育ての問題が家庭の問題、とりわけ母子の問題に限定され、地域・社会との関わりから切り離されてしまうことの問題点について指摘した。そしてこのシンポジウムでは人間のライフサイクル全体の問題として、また学校・家庭・地域全体として、「子育て」にどのように取り組んでいくのか、一緒に考えていきたいという問題提起が行なわれた。続いて三人のシンポジストが紹介され、それぞれの報告が行なわれた。

秋田光彦さん～パドマ幼稚園の活動から

最初の報告は、大蓮寺住職でパドマ幼稚園園長の秋田光彦さんから行なわれた。秋田さんは幼稚園では子どもとその親の世代、大蓮寺ではお葬式など高齢者を含む檀家さん、應典院では若い人たち等の表現の場と、様々な世代の人々と関わってきた。そうした中で、「子育ての危機」を母子間・家族内の問題としてとらえるだけではなく、（映画にたとえて）「寄る」だけではなく「引いて」見ることで、地域や社会を含めて複眼的にとらえることが大切ではないか、と提案された。そのために一つはお寺という空間を活用して、自分や家族の「死」とどう向き合うのかについて語りあうことを通じて、家族や地域を見つめ直す取り組みが紹介された。もう一つは若い世代の人たちがコミュニティでの活動や表現活動を通じて、「地域参加」を含めた働き方・生き方を考える活動が紹介された。これらを通じて、自らが学ぶ主体になることで、どう生きるの

かを問い直し、「生き直し」をしていくことが課題となるのではないかと提起された。

秋田さんは近年の幼保一元化の制度的な議論の中でも、子育ての市場化・消費至上主義的な傾向が問題にされず、子どものみの成長をうながすという一元的な見方にとらわれているのではないかと指摘した。それに対しておとなも子育てを通じて学び、互いに育てられていくという相互性の視点の大切さと、その関係性を保障していく場としての幼稚園・保育園という観点を提示された。具体的にパドマ幼稚園での子どもシティなどの活動を紹介しながら、子ども自らが学び生きていく「子育て」をどのように保障できる環境をつくっていくかが課題だと述べた。さらに仏教者の立場から、子育てをおとなが自己に引き当てて人間として「生き直す」営みとしてとらえ直し、それを学びとして受け止められるような地域社会のあり方を提案された。

梅田美代子さん～「こども芸術大学」の活動から

次に京都造形芸術大学芸術教育研究センター長の梅田美代子さんから、「こども芸術大学」についての報告が行なわれた。同大学では京都芸術短期大学時代の1977年から、地域に開かれた新しい交流の場として、「児童図書館ビッコリー」を開設し、お話し会や野外活動などを続けてきた。2002年には理事長による『母なる大地を求めて』という創立宣言が出され、2005年に幼児教育を担う「こども芸術大学」が創設された。梅田さんによれば、それは芸術の「英才教育」ではなく、感じる力・工夫する力・伝える力などを大切に、子どもと親たちが一緒に育っていく場を目指しているという。

「こども芸術大学」では、お母さんなどが子どもと一緒に通学し、日記や振り返りの時間を設けることで、「気づき」の時間をつくる工夫をしている。またおじいちゃん・おばあちゃんが参加したり、自分の子ども以外の子どもと活動したり、異年齢の子どもたちと混合保育を行なうことで、「地域で子育てをする」形をつくっている。また裏山に畑を作ったり、段ボールや木切れでおもちゃを作るなど、何かを与えるよりも工夫しながら、遊びの中で気づいていくことを大切にしている。芸術大学ならではの風船モビールや折り紙動物園などの創作活動も、作品を完成することよりもコミュニケーションを大切にしながら、親も子どもも感性をはぐくんでいく活動であることが、紹介された。



奥山千鶴子さん～「びーのびーの」の活動から

最後に、横浜市港北区における親子のひろば「びーのびーの」を出発点に、各地で地域子育て支援のネットワークを広げてきた、奥山千鶴子さんからご報告をいただいた。奥山さんは自ら横浜で子育てを始め、「子育て通信」づくりや親子の居場所の問題に取り組む中で、行政と親たちの間のギャップを埋めようと様々な活動を開始したという。まず親たちが必要としている幼稚園・保育園の情報を掲載したガイドを作成したり、お互いの孤立感・不安感を共有し合う中で、特に乳幼児をもった親子の居場所をつくるのが課題となってきた。そのため商店街の空き店舗を利用した親子の広場「びーのびーの」をつくり、NPO法人を立ち上げ、当事者である親たち自身が運営する場所として育ててきた過程が報告された。

「びーのびーの」の活動は全国的にも注目され、国の「つどいの広場事業」のモデルとなり、当時28カ所しかなかった乳幼児の親子の居場所も、現在では1500カ所にも広がっている。そうした広がりの中でネットワークづくりや、新たな担い手を育てる研修も必要となり、現在では親たちをファシリテーター・コーディネーターとして成長させていく学びの場にも創っているという。また学生のボランティアの受け入れも積極的に行っており、携帯メールマガジンや訪問事業な

ども活用して、幅広いネットワークを形成してきた。奥山さんはこうした活動を、循環するつながりのできる環境づくりのために、地域や行政を巻き込んだ支え合いのシステムとして、社会全体で取り組んでいく必要性を強調された。

討議とまとめ

前半の報告を踏まえて、あらためて三名の報告者の方から、フロアからの質問に答える形でコメントをいただいた。秋田さんからは子育てを古代インドの「林住期」にたとえて、あえて世俗のつながりを断ち切ることで新たな視点を獲得する、学び直し・生き直しの場としてとらえてはどうかという提案がなされた。梅田さんは「こども芸術大学」の経験から、親たちが子どもに寄りそう中で、子どもたちから学ぶことで、現在の子育ての問題がみえてくるのではないかと述べた。また奥山さんはこれからの課題として、さらに地域との連携を深めることを挙げ、主任児童員の研修や地域の子育てサロンに出向くなどの活動を始めていることが報告された。

最後に本研究科の桑原知子教授が、それぞれの発言を受けて「元気になった」と述べたうえで、「子育ての危機に迫る」というテーマについて改めて問題提起された。桑原教授は子育てを一方向ではなく相互の「関係」としてとらえ直すこと、その問題や原因だけを切り出すのではなく「つながり」を直視することが大切ではないかと述べた。そのために今回の報告には、固定した境界や役割設定を越えて、子ども本人の力を引き出す資源を見つけていくヒントがあったのではないかとされた。本センターでこのような「子育て」を正面から取り上げたシンポジウムは初めてであり、いずれの報告も実践に根ざした深い考察として、センターにとっても有意義な学びの場となった。教育の現場で生起する問題に領域を越えたアプローチを目指すための「コラボレーション」を、今後もさらに継続していくための出発点としたい。

(文責：吉田 正純)

